

幕末明治の写真師列伝 第八十四回 宮下欽 その六

衝鋒隊の兵たちが連日の戦闘の疲れで熟睡していた夜、密かに接近した高田藩兵 500 名が突如、川浦陣屋の三方から大砲、小銃を撃って襲い掛かっていった。これに驚いた古屋ら衝鋒隊の兵たちは武器を多数残して、松代(まつだい)より越後小千谷方面へ逃走した。衝鋒隊は、その後、越後小千谷で再結集し北越戦争を戦ったが、会津藩が降伏すると他の旧幕府軍同様、仙台から旧幕府海軍の軍艦に乗り箱館へ向かい、榎本武揚を筆頭とする五稜郭の旧幕府軍の一員となって箱館戦争で戦った。そして、明治 2 年(1869) 5 月に降伏、重傷を負った古屋作久左衛門の戦死により解散した。

飯山城に入った松代部隊は、休む間もなく富倉峠に向かって賊軍の追撃にかかるが(26 日早朝出発の先発隊と、27 日朝出発の山地追撃隊(遊撃隊と奇兵隊の二隊)、高田藩の動向が不明であることや、信州諸藩の挙措進退にも不明な点が多いことから、総括隊長の河原左京は松代より甲府へ出陣中の松代藩兵の一部と総督府監軍の派遣を総督府に願った。先発隊は富倉峠を越えて、午後 6 時に富倉村に宿陣させ、山地追撃隊は富倉の国堺である松倉山を越えて平丸峠を経て、猿橋に到着し、富倉から長沢を経て進軍してきた猿橋の先発隊と合流する。そして、これらの部隊は猿橋を出発して新井宿に到着した。さらに、今井口で戦っていた部隊(今井軍)が 27 日早朝に今井口を出発して永江より芝津に入り、それより山中に入って永江の峠を越えて、荒瀬原を経て北国街道に出ると、野尻において柏原の松代部隊と合流した。この両軍も国堺を越えて、関川の関より関山、二本木を経て、新井宿に着いた。こうして新井宿には松代藩兵の約半数が集結する。(本隊は飯山城)この松代藩の陣中に高田藩の使者・前田助十郎が来訪し川浦陣屋にいた賊軍の掃討を報告した。この前田助十郎は新井に向けて進軍中の尾州藩に引き渡すことにした。さらに松代藩の陣中に高田藩の執政・竹田勘太郎などの一行が来訪する。この一行と協議して、高田藩の陳述内容を書面にして提出して貰い、この文書を急ぎ大総督府に報告することとなった。

4 月 28 日、東山道総督府大監軍、岩村精一郎らは天旗を奉じて松代に到着し、翌 29 日には長国寺にて藩主真田幸民と面会した。藩主退出後には真田志摩、大熊衛士とも面談し、岩村は総督府の考えや北越の今後の戦局についてなどを説明した。

そして、閏 4 月 4 日に松代藩士 175 名を従えて飯山へ向かい、松代を出発した。この時、岩村らと松代まで随行していた飯田藩兵 30 名は任務を終了して帰藩している。岩村大監軍は閏 4 月 5 日の朝には途中宿泊した中野を出立して飯山に到着する。翌 6 日、岩村大監軍は飯山をすぐに出立し、松代藩中軍と共に富倉、猿橋を経て新井宿に到着した。

この間、閏 4 月 6 日に飯山本隊を出発した松代藩五番組と信州諸藩の兵は千曲川に沿って北上し大滝村に着陣し、

上田藩は西大滝村に、その他の三藩は下大滝に布陣した。また飯山城の守備としては軍監・河原理助を司令として、五番小隊、九番狙撃隊などの松代藩兵が担当している。新井宿総軍本部に到着した東山道総督府大監軍は、高田藩の無礼な態度について詳細を聴取した後、閏 4 月 8 日、高田藩の執政らを召喚して、岩村自らが直接、尋問した。しかし、尾州藩、松代藩の詰問の際と同様に、反省、服従の態度が見られないことから、岩村は別室に待機していた松代藩ほか信州各藩に対して、高田藩が先非を悔い謝罪の態度も示さないことから、高田城攻撃も決意せざるを得ないと、各藩に述べる。

翌 4 月 9 日、再び高田藩の幹部を招致して、再度、審問すると、11 日、高田藩の幹部も官軍側の決意を察し、ついに謝罪、新政府へ嘆願の義を申し出ることにして、その態度を改めた。しかしながらこの時に取った官軍に対する傲岸な態度により、高田藩は東山道総督府大監軍の印象を極めて悪くしている。このことが後に岩村が長岡藩の河井継之助と小千谷慈眼寺で会談した際に、談判決裂した伏線になったように筆者は想像している。

閏 4 月 14 日、飯山城を守備していた軍監・河原理助と五番小隊などは飯山を出発して西大滝に着陣して、九番狙撃隊は全員、松代城留守警備のため西大滝より松代に帰った。

翌 15 日、賊徒の一部が松之山に押し寄せてきたとの知らせがあり、高田藩の応援のため五番小隊は現場へ向かうこととなった。

閏 4 月 17 日、薩摩藩の黒田清隆、長州藩の山縣有朋両参謀率いる北陸道の薩摩、長州の軍五千が京都より高田城下へ着陣する。

閏 4 月 20 日、新井宿に滞陣していた信州諸軍は、岩村の指揮により小千谷に向けて出発する。この軍は先鋒の長州軍六小隊と砲三門、高遠藩兵二小隊、飯山藩兵二小隊、高島藩兵二小隊、松代藩兵十二小隊、岩村田藩兵一小隊、尾州藩兵八小隊、田ノ口藩兵一小隊、飯田藩兵一小隊、大垣藩兵三小隊、薩摩藩兵六小隊と砲三門と、兵員三千六百の大部隊であった。この大部隊は、21 日、細野村、22 日、千手駒に、23 日には松代(まつだい)を経て十日町にと信濃川に沿って北上進撃する。この時、十日町周辺の敵は小千谷方面に後退して、雪嶺芋坂に数か所、堅固な砲台を設け、この大部隊を迎え撃たんとしていた。この雪嶺とその手前の芋坂の攻撃については、先鋒として高田藩兵、二陣に尾州藩兵、三陣に松代藩兵、四陣に松本藩兵、後陣に天旗護衛隊の松代藩六番小隊と飯田藩兵一小隊の大監軍を配置することとなった。また、上田藩(現在の長野県上田市周辺を支配した藩)、須坂藩(現在の長野県須坂市常盤町)、六川陣屋(上高井郡小布施町都住 101-1)の椎谷藩の信州軍も信濃川の東岸より小千谷進駐のため進軍し始めて、雪嶺に向かってゆく。

(森重和雄)